

近でる 感激し たもの

本誌よりの
おたづね

一、最近御覽になつた文楽、歌舞伎、能樂其他一般古典藝能のうち特に深い感銘をお受けになつたもの。
二、それらのどういふ點に感銘をうけられたでせうか。

御 回 答

河竹繁俊
三四ヶ月前になりましたが、東京劇場で上演されました、尾上松緑主演の「新古今劇十種の内「土蜘蛛」のあふるるばかりの氣魄には打たれました。

安藤鶴夫
一、帝劇に於ける藝術祭（邦樂）の第三日目古靱太夫・清六の「堀川一終演後の客席から贈られた拍手。

二、古靱太夫三日間の所演では「重の井」に最も感銘を受けましたが、この拍子は舞臺と客席とが渾然たる雰囲気醜味を現出したわけで、私の貧しい藝道行脚の中で、

これが所謂「ちわ」といふものゝ最大のものでありました。

安 部 豊

近來文樂の「人形芝居を見る機会なく遺憾に思ひおります。
去る十一月東京劇場の吉右衛門の陣屋の熊谷に相當な感銘をうけました。同優の圓熟した藝格が著しく、殊に後半の熊谷の悲痛やる瀧ない心の相が際立つて表現されてゐました。

岩 田 豊 雄

疎開してゐるため何も観てゐません。此間當地へ前進座がきて、長十郎、翫右衛門兩君遊びにきてくれましたが、本音を吐くと近くの市へきた相生太夫の一座が當地までできてくれた方が嬉しかったです。疎開してると却つてさういふ心理を懷くのであります。

大 山 功

一、疎開してからも二年以上になりますので都市の古典には接しませんが、地方の傳統次別、藝能を時々見る機会に恵まれました。先日會津の獅子舞を觀ましたが、なかゝゝ滋味のあるものでした。
二、素朴性、單純性、生活性等々の表現に感銘したのだと考へます。

楠 木 清 方

警報發令下の暗い中で新橋演舞場に出演の文

樂を、芝居では故人市村の石切梶原あたりを最後にそれからはずつと御無沙汰、偶にラヂオで聴くばかり、最近では相生の引窓に鷹治郎を偲びました、この頃下座の鳴物をきゝたいと思ふことが折々ありますが、劇なら久保か久板あたりの實のある脚本で瀧澤や小澤あでり力のはいつた演技が見たいと望んだるます。

山 口 廣 一

一、近松の原作によつた「炬燵」での翫雀の治兵衛——とかくの評ある人ながら、この狂言のこの役に限つては父鷹治郎以上といふも過褒でなし。
二、少し古いが映畫「キニリー夫人」の持つ教化性——もちろん映畫自身の意識してないことだが、私はこの映畫から敗戦日本にもなほ見出し得る明るい希表感で興奮した。

遠 藤 慎 吾

一、大阪で文樂座を訪れてから、もう三年以上たちます。
歌舞伎も能も二年近く見ません。最近の觀客席の異様な風景を考へると、古い、いゝものを味はひに出かける氣がしなくなつてしまふのです。最近では日本演劇の系譜といふものをギリシヤ劇と關連して考へてみたと思ひ、ギリシヤ劇を拙い翻譯を通してポツ／＼讀んでゐます。

二、そして、その中に潜む生々しいまでの人間本然の姿の躍動に驚いてゐます。これは歌舞伎特に人形劇にあり／＼と現れてゐるものなのに、深い感銘を覚えます。

北林透馬

一、終戦後、歌舞伎、能、文楽いづれも機會がなくて見てゐません。機會があつたとしても歌舞伎は見たいと思ひません。現在の俳優陣と興行方法とは、歌舞伎の面白味など、味ひやうがないではありませんか。その點文楽は、機會さへあれば是非見たいと思つてゐます。
二、戦争中見たものでは、やはり能樂に一番興味を感じました。その靜かなものに魅せられたのだと思ひます。

食満南北

どういふわけか近頃竹本織太夫を聴く場合が多いのです。さうして同太夫の酒屋を聴いてひどく感心したのです。ナゼといはれると困りますが、何となくスッキリとしてゐたことです。手摺の連中も非常にすなほであつたことも亦嬉しいと思ひました。

大江良太郎

一、最近観た古典藝能とある問ひを、二十一年暮と二十二年新春の歌舞伎に索めます。「明烏花濡衣」澤村宗十郎の時次郎「壽三

番叟」松本幸四郎の翁
二、僅か二十五分に満たない舞臺でしたが、馥郁と香ふ江戸生世話物の濃艶な風韻に、理窟を忘れ、許してくれればかり「明烏」の美的情趣は清らかに酔ひました。

老齡を語る自然な腰の曲り方、翁の面をつけて身體そのままでピツタリ合つた高雅な舞ひに長壽萬歳の藝格を祝福したくなり
ました。

久藤達郎

一、藝術祭(昨年九月、東京劇場)に菊五郎、三津五郎が踊つた「三社祭」。
二、日本古典藝能のもつ淡泊さといふのが、非常に高度に表現されてゐて、観てゐてかう何といふことなしに僕自身の問題として新劇の舞臺を深く噛みしめてゐました。そしてこの時(不勉強で一向わからんのです)が何とか太夫のやつた清元には、二人の踊にも勝るようなさわやかさを覺えました。門外漢でも良きものはきけるものです。

飯塚友一郎

旅行中に伊豫の駄川で見た「堀川」同じく俵津で見た「秀衡館」などに深い感銘をうけました、いづれも淡路肌で、それほど達者ではないのですが、郷土藝能として、今日でも邊僻な農山漁村に残る人形芝居には、不思議な陰影と魅力をもつてゐます。

三月の文樂座

第一部「碁太平記白石斬」雷門(松太夫)揚屋(呂太夫)人形は宮城野(龜松)おのふ(紋昇)「勸進帳」(相生、松、つばめ、濱掛合)人形は辨慶(紋十郎)「帯屋」(つばめ、濱毎日替り)人形はおはん(文五郎)長吉(榮三郎)おきぬ(紋司)長右衛門(光造)「八百屋お七」(七五三)人形はお七(榮三郎)「大文字屋」(大隅、織)人形は助右衛門(門造)お松(光造)權八(玉助)傳九郎(玉市)榮三郎(榮三郎)「一保名物狂」(伊達)「萬の葉」(古靱)人形は萬の葉(紋十郎)保名(文五郎)狂亂の保名(龜松)